



# 我と触手

むっ？なんじゃ…  
なかなか可愛らしい  
魔物じゃな…？

ぬる…

？

ぬらぬら…

ぬらぬら…

アニヲは団長たちと一緒に溪辺にパカンスに来ていた。  
しかし、スイカを買いにいっている間にはぐれてしまった。  
団長たちを探しているとき、巨大な肉の塊のような魔物と出会う。  
戦おうにも武器をもっていなかったのでとりあえず  
コミュニケーションをとることにしたのだが…。

ぬらぬら…



ヒクッ

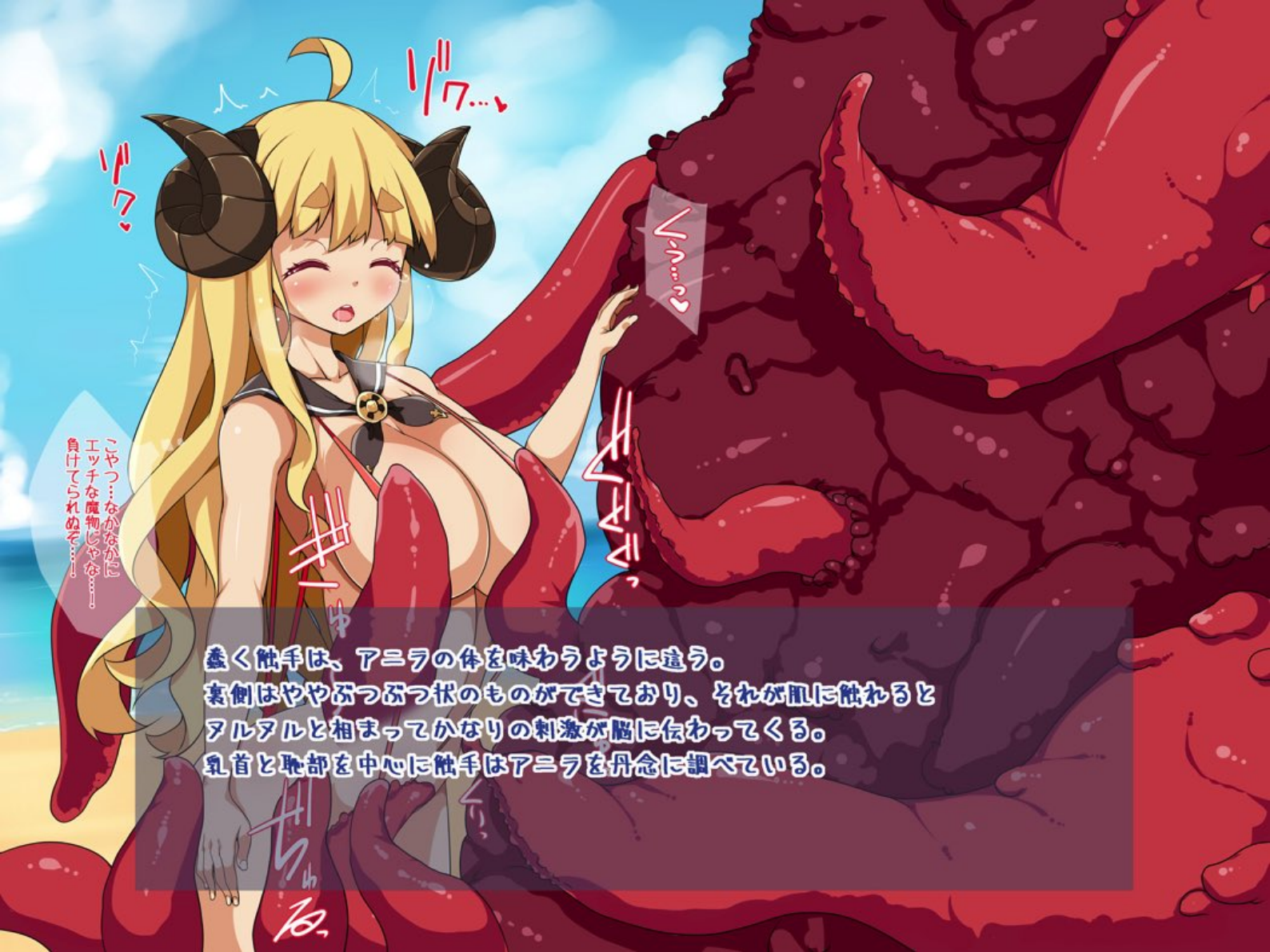
むっ...これは...  
胸が膨らんだ...  
くふふ...面白い生物じゃ...  
ちよっと遊んでやるとするか

しばらく様子を見ていると、肉の塊の中から多数の触手が出現した。大小さまざまな触手が、それぞれ生きていくのように動き、アミヲの様子を伺っているのか足元を埋め尽くさんばかりに蠢いている。その先端からは謎のアルアルが分泌されている。

ぬる

す...

ぬる...  
ぬる...



こやつ...なかなか  
エッチな魔物じゃな...  
負けてられぬぞ...

蠢く触手は、アニラの体を味わうように這う。  
裏側はややびつびつ状のものができており、それが肌に触れると  
マルマルと相まってかなりの刺激が脳に伝わってくる。  
乳首と恥部を中心に触手はアニラを丹念に調べている。



次に触手は、アニラのきわどすぎる水着をひっぺがした。  
ドラフ族特有の肉感たっぷりの体が太陽にさらされる。  
度重なる刺激でおっぱいはやや膨張していた。  
さらに太い触手が粘液を大量にまといアニラの肌を嘗め回す。  
アニラは全身を震わせ襲ってくる快感に耐えている。



くふう...!!  
ふ...ふっとい贈種が  
我の中に...んんっ!  
乳首もコリコリの何かに  
弄られて...ふああっ!!

油断していると、一本の触手が濡れて敏感になっている  
アニラのおまんこへと進入した。抵抗なくすんなり進入を許した  
アニラまんこへ、触手の容赦ないポディアローが子宮を突き上げた。  
同時におっぱいにも触手がかぶりつき、赤ん坊のように乳首を  
吸い上げ始める。強い快感にさすのがアニラも声が漏れてしまう。

ハッ!!  
アッ!!  
アッ!!  
アッ!!





ぬっ…まだまだ元気じゃな…  
我は団長殿と遊びたいと  
いうのに…しかたない。  
もう少し相手をじてやるさっ

うっ…またヌルヌルが…  
我を拘束してまたあそびを  
ぐちゅぐちゅやるつもりか？

触手の猛攻は終わらず、アニラは拘束から逃れられない。  
見た目のわりに強い拘束力と、先端からにじみ出る  
謎の粘液の成分で、体が火照ってしまっていて、  
上手く力が出ない状態であった。





ぬるぬる...  
ぬるぬる...  
ぬるぬる...

この強い拘束力...  
並の魔物ではないな...?  
それかもしかして...我のことが  
好きなのでは...???

足を拘束していた触手が、アニラの下半身に伸びてくる。  
太く、ワルワルが這い上がってくる感覚に、背筋を冷やすアニラ。  
水着をよけて、おまんこに狙いをさだめる。  
意思を持った生物のように、じっくりと観察しているようだ。  
しかしアニラは力が入らず、抵抗が出来ない。

ぬるぬる...  
ぬるぬる...

ぬるぬる...  
ぬるぬる...  
ぬるぬる...  
ぬるぬる...



若干油断していたアニラのおまんこに、極太の触手が迫る。  
粘液の効果で、トロトロに熟れたまんこに強力な一撃を叩きつける。  
子宮の奥まで一気に挿入された触手に、さすがのアニラもイきそうになる。  
長さに限界のない触手は、子宮を押し上げるように圧力を強めた。



人間のようないピストン運動ではなく、挿入したまま体内を  
めちゃくちゃにかき回されるようなセックス(?)。  
すると触手の先端あたりから白濁した濃い粘液のようなものが  
注入される。人間の精液のようなソレは徐々に体内を満たし、  
ついには陰唇から大量に漏れ出してしまふ。



白濁した粘液...これは  
こやつが生殖器で、まさか我  
早まされてしまったのか？  
全身がしびれていうことをきめ

孕まされたかもしれないという思いが、アニヲをさらに絶頂へといざなう。  
愛しの団長との子供を孕みたいという思いが、逆に今の状態を  
さらなる興奮へとおしすすめていた。  
白濁粘液は腔内を熱く焦がし、逆流して外に放出される。  
その快感は、アニヲの精神を徐々に蝕んでいくのだった。

またイカされて  
しまった！不覚じゃ...  
団長殿に顔向け  
できぬぞ...!

かりかり

びびり

びびり

たかたか

たかたか

びびり

びびり

たかたか

たかたか

たかたか

たかたか

たかたか

たかたか

ちちち

びびり

びびり

びびり



ぬわっ……  
なんじゃ……  
ヤツの体内か？

くっ……我としたことが  
不覚を取ってしまったなっ！  
どうにかして抜け出さなくては  
ならぬが……どうする……

いつのまにか触手の体内らしきところへ取り込まれてしまったアニラ。  
ぶるぶるの肉におおわれた空間には無数の触手が生えている。  
アニラはその触手に相変わらず拘束されている。

にゅっ



なんという性欲の高い  
化物じゃ！まるで団長殿！  
いやいや、こやつは魔物！  
ある意味生命の本能に  
忠実なのかもしれぬな！っ

触手はしばらく観察するようにアニラの周辺を触手でなめ回すと、  
下半身に触手を伸ばした。  
抵抗できないほどの強い力でおまんこをかっぴらいていく。  
アニラは全力でマン穴を閉じようとするが…。



バカ  
我が  
のあ  
それ  
どち  
のど  
だか

抵抗するアニラの目の前に、ひときわ巨大な触手が現れた。  
先端が口のように開き、涎をたらしている。  
それはもはやお遊びとしての触手ではなく、  
肉を喰らって食べるような形状をしていた。  
さすがのアニラもピンチである。

どかた...!!

ぐわん

しかし…なかなか気持ちが良いのも事実なんじゃないかな…  
このまま弄られても…いいかも？

ぐう…抵抗ができません…  
このまま私は食い殺されて  
しまうのか…？

抵抗もむなしく、おまんこは聞かれる。  
目いっぱい露出したアニラの下半身は、むっちりして最高の肉感だ。  
それをまじまじと見つめるように触手たちが周囲を取り巻いていく。  
人間以外でもこの至高の肉体が理解できているのかのようだ。

ほめ





そこに巨大な触手が大きく口を開いてロックオンする。  
アニヲは恐怖と同時に興奮を覚えている。  
今までにない快感を提供してくれるかもしれない。  
もちろん平ぬかもしれないという極限状態の中で  
感情が早ぶっているのもあったが。



身構えていたアニラのおまんこに太い触手が力強く叩きつけられる。  
潮を吹き散らかしながらアニラは一瞬で絶頂する。  
期待していたとおり、涛まじい快感が全身を襲う。  
奥に挿入されるたびに触手が肉ひだをこすり、  
プリプリと音をたてるたびに突き刺す刺激が脳に伝わる。



声にならない声を上げ、アニラはなすがままの状態だ。  
触手は奥へ奥へとすすみ、腔内を一瞬で制圧してしまう。  
子宮にはさすがに入り込めないと見るや、腔内をこれでもか  
というほどにかきまわす。  
アニラは全身を激しくビクつかせながら耐えている。





全身の快感が一気に解き放たれたアニラは、心地よい余韻に浸っている。せらしないおまんこを触手たちに見られているにもかかわらず、その表情はどこか満足げであった。



ぬう！こやつは体力は無限か？さすがに我でも対処しきれぬ！

おまる  
いまやアニラは謎の触手生物のおもちゃになっていた。  
しかし食い殺されるわけでもなく、優しく丁寧に扱われていた。  
ただひたすらに、性欲が強い生物であるため危険であることに変わりはない。



大きさまざまな触手が内蔵されているようですが、中でもひときわ大きな触手が下半身に迫る。グロテスクだがエロティックな形状をした触手はスケベ心まるだしでおまんこに淫をたらして興奮している。

これまたでかい手じゃ...  
いくら我でもな続けに  
そんなイチャモン揺られたら  
耐えられぬからめぞ...



いいだろう！我が  
どんな攻撃であっても  
受けきってみせるぞっ！

そっやってじっくり  
責めるのはいささか  
趣味が悪いな...？

子触手が体を拘束して、巨大触手が内部を陵辱する。  
この生物はスケベに關してはかなり頭がいいようだ。  
体内に拘束されてる以上、下手に抵抗できないので  
アニヲは耐えることにした。

ア  
ニ  
ヲ  
...

ロ  
ッ  
ッ  
...





決心したアニラに、強力な一撃が挿入される。  
ゲンゲンと勢いよく奥へと挿入される触手をアニラは見つめる。  
己の体の中にこんな異物が入ってしまった。  
その異様な光景に興奮してしまう自分が憎かった。



触手の中からさらに小さな触手を無数に伸ばして  
子宮内に進入してくる。  
あっさり子宮墜ちしてしまうアニラ。  
体の自由が奪われた状態での子宮満。  
我慢していた肉体は少しずつ力を失っていった。







くっ! 喰われる!  
我で遊ぶのも  
もう飽きたか?

ん?...

ん?...

触手に全身の自由を奪われるアニヲ。  
大小の触手に固定され、全く身動きが取れない。  
徐々に触手の肉内に埋まっていく。



体を自由を奪うと、触手君は次にひとさわ大きな触手を大量に出現させる。アミラのみとももくらいある太さの触手がアミラの体に迫る。

うら！身動きが取れぬまま我を  
どうやって料理しようというのじゃ…  
だが絶対に負けぬぞ…っ  
我は耐え抜いてみせる…！！

巨大触手がアニラのおまんこを力任せに広げる。  
感度が高まっているアニラのおまんこは、すでにトロトロに  
熟している。おまんこを湿らす粘液は触手のものではなく  
アニラ本人のものだった。

いおかん♡



ふっ！  
私のクリトリスが...  
喰われている...っ！

のぞ

次に触手はピンク色のかわいいアニラのクリトリスを責める。  
モノ欲しそうなほど勃起したクリトリスを触手が  
丁寧にちゅるりとなめる。  
見た目からは想像もできない触手の柔和なテクニックに  
あにらも全身を痙攣させ感心する。





クリトリスを弄びおわると、尿道を責め始める。  
さすがにソコは無理と、アニラは身をよじるが体は動かず。  
痛くしないような触手の優しい責めが  
逆にアニラを恐怖へと誘う。





触手が腹を押し広げて体内に侵入する。  
すでに腹は歪んでいて腹圧はきかず、  
触手は一瞬で子宮を叩く。  
腔内はアニラと触手の両方の粘液が混ざり合い  
大量にあわ立っていた。



ぶりっぶりの子宮内に触手を強引に突き入れる。  
子宮は心臓のようにビクンビクンと鼓動し、  
子宮を最奥へとさそう。  
拘束された体を激しく上下させ、アニラは感じたことがないほどの  
絶頂を何度も繰り返し達成した。





もう焼くなり煮るなり  
おぬしの好きなようにするがよい。  
だがすこしでも隙を見せれば  
隙け出してみせようぞ！

ふん！すっかり  
おぬしのおもちやに  
なつてしまったな！

度重なるファックに、アニラは若干あきらめ気味であった。  
なにより、触手によるセックスはなかなか気持ちいいものだった。  
しかし、心の中の団長のところに帰りたい気持ちは変わらず、  
抜け出す方法を考えていた。

アッ... ヒッ...




険を探しているとき、ひときわげロテスクな触手が出現。  
犬のようにアニラの顔をべろべろとなめ始める。  
なめた部分はズリズリとしびれ、なんらかの成分をもっているようだった。



またまた油断したアニラのおまんこに、触手がにゅるっと進入。  
ガードする暇もなく腔奥まで侵入を許してしまう。  
荒々しく出し入れする触手の攻撃に、徐々に理性が奪われていく。





触手からさらに小さい触手を伸ばす。  
腹の肉ひだを丁寧になめ取るように這う。  
触手の粘液が肉ひだを溶かすように浸透し、  
苦痛が快楽へとかわっていく。

まずい！手足が  
完全にロックされてて  
逃げ出せぬ！それどころか  
私の大事な子宮が  
破壊されてしまうぞ……

触手は膈を攻め落とすと、次は子宮へと侵入を試みる。  
子宮口は堅く閉ざされていたが、膈内をもてあそぶうちに  
いつのまにか淫をたらし、触手を手招きするように  
ヒクヒクしながらその進入を待ちわびていた。

まっ……待たない！  
そこは……ツヨコはもう少して  
優しくしてくれ……！



子宮内に進入した触手が見えないところで暴れまわっている。  
いつどのような攻撃が行われるかわからない恐怖と期待が  
入り混じり不安に駆られるアニヲ。



粘液の効果で全身がしびれ、麻痺していても  
膣内と子宮の感覚だけは逆に過敏になっていた。  
弛緩した膣内から大量の触手粘液が逆流する。



子宮から引き抜かれる触手。  
同時に、大量の淫を膣内から吐き出すアニラまんこ。  
全身を痙攣させ体内から粘液か体液かわからないものを  
アリアリと吐き出し続けた。

じたばた

ぬわーっ

これ以上犯されたら我は……  
おかしくなってしまうんじゃないか……  
一生のお願いじゃ……

ぬわーっ！  
我はもう帰るぞ！  
団長殿のところへ  
帰してくれえ！

手足を拘束され、じたばた喘ぐアニラ。  
埋まってしまった足は、みみずのような触手で満たされている。  
触手に対して返してくれと懇願するが、触手なので聞こえているか  
どうかは微妙なところである。

ぬわーっ

じたばた

ぬわーっ



大触手がじゃれる犬のようにアニラをベロベロなめまわす。  
少しかわいらしくも思ってきた触手だが、  
見た目はやはりグロテスクである。



さらに本数が増し、触手にいちやつかれるアニヲ。  
なめられたところはぴりぴりとしびれ、そのあとはそこが  
性感帯であるかのように感度が増す。  
この触手の特殊能力である。





ペロペロに気を取られていたアニラは後ろからの侵入者に  
気づかず油断してしまった。  
全身の感覚が薄くなったところで貫かれたが、  
いつもと違う感覚が体内に走った。



それもそのはず、貫かれたのはおまんこではなく  
お尻のアナルであった。  
腔内よりも高温な腸内に、太い触手が次々と進入してくる。  
予想外の侵入者にあわてるアニラ。



後ろに気を取られていると、今度は前からの訪問者である。  
回内を粘液で満たしながら奥へと入ってくる。  
壊れるか壊れないかのギリギリのところを  
奥へ奥へと侵入してくる。



触手粘液が体内に直接作用し、全身が麻痺してしまう。  
声もせず、体内から液体を漏らしながら、  
アニラは早く終わってくれと願った。



満足したように触手はアニラの体内から手を引き抜くと、  
さまざまな体液が混ざったものを汚い音とともに吐き出す。  
おもちゃのように遊ばれるアニラも体力の限界が近づいていた。



だからそろそろ  
終わりにせぬか？

くそっ…色んな恥ずかしい  
格好で我を犯しおって…  
おぬし…あとで覚えておれ！

そろそろ本気で帰りたいアニラは閃いた。  
触手君が満足に自分を犯し終わったら開放してくれる  
のではないかと。

15No.1



そんな太いものが  
三本も…？冗談じゃろっ？  
さすがに死ぬぞ？

そんなことを思っていると、再び触手がおまんこに集まってくる。  
グロテスクな容姿をした三本の触手が、  
淫をたらしながら狙いをさだめる。



こやつ…本気で二本同時に  
きおったわ…っ！  
くう…ぶつぶつの感触が  
膣内を蠢いてるのがわかるぞっ

まさか二本同時とは予想してなかったアニラの体内に  
ギチギチと膣を鳴らしながら触手が侵入してくる。  
独特の形をした二本の触手が互いに競い合いながら  
膣奥を目指す。

びるる

びるる

びるる

びるる

びるる

びるる





アキラのおなかがポコッと膨らむ。  
緩んだ隙に子宮内へと侵入した触手が大量の体液を  
子宮内に吐き出したためだ。  
熱い体液に子宮内を焼かれ、アキラはビクビクと震える。



子宮に気を許していると今度はおっぱいをわしづかみにされる。  
がぱっと触手の先端がわれ、牙のような小さな触手が  
おっぱいをぎゅうぎゅうと締め上げると、  
子宮攻めによって乳腺が開いたアニラのおっぱいから  
母乳がぼびゅぼびゅと噴出す。



触手から解き放たれたアニラの体から液体が噴出した。  
もはや体液を噴射するなにかの機械のようだった。  
周りの触手にご褒美をあげるようにアニラは  
体液をひりだし続けるのだった。



面倒じゃーまじで  
かかーてらーっ！

くそっ！いいかげん  
我を解放せぬかーッ！  
もう十分遊んでやったであろっか！  
まだ物足りぬとでも！？

ついに触手とアニラの最終決戦が始まる。  
アニラは脱却をさらけ出し触手を揉捻する。  
すると触手がうねうねと蠢きだした。

あゝ

ぬる



しかし、そこに現れた触手の数はアニラが予想していたよりもはるかに多いものだった。今までにない危機感を感じアニラはちょっと後悔したが時すでに遅しである。



や...やめよ...  
我が壊れてしまっぞ...  
そんなもの...

ま...まてまて...  
なんじゃその  
ク回テスワな...

そこにトドメを刺すかのようにひときわゲロイ触手が  
アニラのおまんこにかぶさった。  
あきらかに殺傷能力が高そうな触手の口内が  
アニラのおまんこを責める。

お...お...

おまんこ  
責める

おまんこ  
責める



司令塔のようなゲロイ触手がアニラの中に突撃した。  
同時に、周りの触手も我こそはと腔内に進入してくる。  
腔内は一瞬で満杯になり、触手で蓋く満員電車になった。



アニラの体内に進軍してくる触手は、一瞬で腔内を制圧。子宮口も瞬時に攻略し、子宮内を蹂躞し始める。子宮も定員オーバーになり、軽秤のようにアニラの腹は膨らむ。身をよじりイこうにも完全拘束されていくこともできずアニラは快楽にもたえる。







腹ボコにされ、絶頂により体力をすべて使い果たしたアニラ。  
ソレを確認した触手が満足したかのようにアニラから引き抜かれる。  
子宮と膣をみたしていた触手達がドット逆流し、  
その刺激で最後に残ったアニラの意識は消えていった。